

## 学術講演会

# 中国国民性研究の幾つかの問題について

沙 蓮 香  
 訳 謝 小 彬

関西学院大学社会学部長遠藤惣一教授および萬成博教授の招きに応じて、5月24日、貴学部にて、「中国国民性研究の幾つかの問題について」という題の講義をした。このチャンスを下さった両先生および社会学部の諸先生方に深く感謝すると共に、中日両国間の学術交流と友好往来が今後ともますます発展できることを念願している。

次に紹介する中国国民性に関する幾つかの問題は、私が研究している「中国国民性と中国社会改革」という研究課題（以下「課題」と略す）の一部である。当課題は1986年10月から始まり、1989年2月に一応完成した。

### 〔課題の提出〕

1978年頃は、「文化大革命」が終わったばかりであり、人々はやっと悪夢から覚めたようであった。「文化大革命」の熱狂と残忍さを思い出すと身震いするほど怖く感じる。「文革」中の集会的現象をより理解するために、私は自分の専門を哲学から心理学に変え、人間の問題を研究しようと決心した。

1982年から1984年まで、東京大学文学部において二年間研修したが、当時深く感銘を受けたことは二つある。

第一に、戦後日本の経済発展のスピードは確かに速く、すでに豊かな社会になったことである。そして、日本人の文化教育レベルは比較的均質であり、文盲がほとんどおらず、現代化にたいする適応力が高い。それに比べて、中国はまだ立ち遅れた状態にあり、現代化建設や現代的な文化と生活に余りにも慣れておらず、また適応できないのである。

第二に、中国人は愚か者ではなく、学習と研究

の環境があれば、よい成績が取れる。にもかかわらず、その貧困のために、中国人はいつも外国人から軽蔑されるし、自分自身を軽蔑し、また自己に対する認識が足りないことも事実である。

中国人の自己認識を進展させるために、東大留学中、他の在日中国人学者たちと一緒に、中国人について研究することを論議した。

1986年、中国学術界から現代化と伝統文化の間関係の問題が提出され、そしてこの問題はますます重要になってきた。この背景で私が提案した中国人研究の問題は、中国社会の要求に応じ、国家教育委員会と社会科学基金委員会の支持を得て、困難かつ有意義な研究過程に入った。

### 〔歴史上の中国人研究に関する主な観点〕

すでに調べられた資料から見ると、中国人の国民性に関する最初の著作の出版年は、1849年であり、今日まで150年もの歴史があったのである。

この一世紀半にわたって、中国と外国の学者たちは中国人に対して、様々な考察と研究を行った。外国人の中に、宣教師あるいは地理学者、医学者もあれば、外交官あるいは漢学者もある。彼らは長い間農村と都市に生活し、それぞれ自らの体験と見方を持っている。例えば、A. H. スミスというアメリカの文化人は、中国山東省各地で伝教し、居住期間は五十年もあった。1894年に発表された彼の「中国人の特性」（日本語訳「支那人の性格」）という書物は、彼が中国（特に民間）にいたときの所見に基づいて、中国人の26の性格特徴を例に挙げたので、中国人を研究する各国の学者に大きな影響を与えただけでなく、当時中国駐在の各国青年外交官の必読書として誉め称えられたのである。中国の著名な歴史学者梁漱溟は、「中国文

化要義」において、中国と外国の学者が描いた中国人の民族性格特徴を10種類にまとめた。即ち、私利私欲を計る、勤儉、礼儀正しい、平和文弱、満足自得、旧習を守る、いい加減、堅忍及び残忍、韌性と弾力性、円熟である(中国路明書店1949年、pp. 24-26参照)。われわれの課題の研究において、私は、今までの中国人に関する内外の学者の主な観点を8種類にまとめ、大卒以上の学歴を持つ500人の知識人を対象としたアンケート調査を行い、80年代の中国知識人の歴史上の各種の観点に対する見方を知ろうとしたのである。

「課題」のデータに収められた内外の学者は70余名あり、主な観点は500あまりに達したが、その多くは内容上の重複があるため、歴史上の各種の観点をより把握するように、「仁愛慈悲、反省修身」、「おおらかで平和寛容」、「中庸謙虚、円熟含蓄」、「聡明器用、自ら弛むことなく奮闘する」、「勤儉で労働に耐え、貧困に安んずる」、「大まかで無知」、「私利私欲を計り、虚偽嫉妬」、「家族第一、権威主義」の8種類に分類した。70余名の学者の関係著作、論文に現われた各種の観定の頻数から見ると、中国人は「勤儉で労働に耐え、貧困に安んずる」という観点が最も多く、24.4%を示した。その次は「私利私欲を計り、虚偽嫉妬」であり、22.3%を示した。一番少ないのは「おおらかで平和寛容」で、5.2%を示し、二番目に少ないのは「聡明器用、自ら弛むことなく奮闘する」で、6.8%

を示した。そのほかの4種類は中程度の頻度であった(表1参照)。

表1 歴史上の主な観定の出現頻度 %

勤儉で労働に耐え、貧困に安んずる	24.4
私利私欲を計り、虚偽嫉妬	22.3
家族第一、権威主義	12.9
仁愛慈悲、自ら修身する	11.6
大まかで無知である	8.5
中庸謙虚、円熟含蓄	8.3
聡明器用、自ら弛むことなく奮闘する	6.8
おおらかで平和寛容	5.2

以上8種類の歴史上の観定に対する現代中国学者と知識人の見方を知るために「課題」ではアンケート調査を通じて、8種類の観定を評価させた。その結果、得点が最も高いのは、「聡明器用、自ら弛むことなく奮闘する」で、平均値は2.63であり、その次は「おおらかで平和寛容」(2.62)で、第三位は、「勤儉で労働に耐え、貧困に安んずる」(2.5)である。得点が最も低いのは「私利私欲を計り、虚偽嫉妬」で(-2.34)、二番目に低いのは「家族第一、権威主義」(-1.2)である。「中庸謙虚、円熟含蓄」の得点は0.54で、0点に近いので中性的価値評価に属している<sup>1)</sup>(表2参照)。

(美点、欠点項に0選択があるので、合計は百パーセントに足りない)

表2 歴史上の主な観定に対する評価 (単位%)

歴 史 観 点	平均値	賛成	反対	どちらともいえない	中国人最大の美点	中国人最大の欠点
勤儉で労働に耐え、貧困に安んずる	2.50	83.1	11.0	5.9	24.9	2.6
私利私欲を計り、虚偽嫉妬	-2.34	25.0	71.9	3.2		45.2
家族第一、権威主義	-1.20	32.3	60.6	7.1		20.3
仁愛慈悲、反省修身	2.24	81.1	9.1	9.2	12.1	
大まかで無知である	-1.39	32.4	62.9	4.6		16.4
中庸謙虚、円熟含蓄	0.54	55.4	35.5	9.1	2.0	11.8
聡明器用自ら弛むことなく奮闘する	2.63	82.4	10.1	7.5	35.7	1.3
おおらかで平和寛容	2.62	82.0	8.7	9.3	24.3	

P<0.05 N=542

1) 質問票は七段方式、即ち、5(最も賛成)3(非常に賛成)、1(賛成)、0(どちらともいえない)、-1(反対)、-3(非常に反対)、-5(最も反対)で評価を行い、最後に平均値を求める。平均値は0あるいは0に近いものは、中性的価値評価に属する。

この様な評価から得た結果を歴史上の主な観点の出現した頻度と比較すれば、大きな差があることが判る。すなわち、歴史上最も少ない頻度を示した国民特性は最高点に近い得点を得た。もし、5, 3, 1の三つの肯定的評価を賛成類とし、-5, -3, -1の三つの否定的評価を反対類として、パーセンテージで示せば、表2ようになる。その中で「中庸謙虚、円熟含蓄」特性に対する賛成と反対の差は小さく、比較的に接近している。調査票では被調査者に歴史上の観点を評価させると同時に、中国人の最も大きな美点と欠点をも選択させた。その結果は次のとおりである。最大の美点について：「聡明器用、自ら弛むことなく奮闘する」(35.7%)「勤儉で労働に耐え、貧困に安んずる」(24.9%)、「おおらかで平和寛容」(24.3%)であり、最大の欠点は、「私利私欲を計り、虚偽嫉妬」(45.2%)で次は「大まかで無知」(20.3%)である。また、11.8%の人は「中庸謙虚、円熟含蓄」を最大の欠点にしたのに対して、2%の人はそれが中国人の最大の美点であると認めたのである。これは、中庸円熟という国民特性を評価及び選択に当たって、比較的大きな曖昧性が存在していると思われる。

総じていえば、歴史上における中国人研究の主な観点を評価する調査を行った結果は歴史上の観点の出現頻度と大きな食い違いがあり、正反対のものさえあったことが窺える。即ち、歴史上において中国人が余り持っていないと思われる国民特性——例えば、「おおらかで平和寛容」と「聡明器用、自ら弛むことなく奮闘する」など——は今回調査の時点で中国人の最大の美点であると比較的多くの人は考えたのである。事実上、このような差異は、中国人性格観にたいする不統一を微妙に反映したものである。

#### [14項目人格特質に対する評価の特徴]

「課題」は歴史上の観点を整理、調査した基礎の上に、さらに現実生活に現われた各種の心理現象とを結び付けて、中国人の民族性格に関する質問調査票を制作した。中国の12の省、市で、無作為抽出方式で2000件の標本を選択した。質問票には32の問題、600余項の指標がある。次に紹介するの

は、その中の二つの問題で、14項目人格特質に対する評価と中国の異なる時期における歴史人格に対する評価である。

14項目の人格特質は次のとおりである：

1. 仁愛。例えば人に対して博愛、仁慈、親切を尽くす。同情と誠意の心を持つことなど。
2. 気節。例えば危険に面しても畏れない、折れても曲がりはしない、人に損をさせて自分の利益を計るようなことはしないなど。
3. 俠義。例えば家で父母に頼り、外は友達に頼る。危険な時に助け合うことなど。
4. 忠孝。例えば年長者を尊敬し、国に忠を尽くす。信義に背く、恩知らずのようなことはしないなど。
5. 理智。例えば熟考してから行動する、理をもって人を説得する、智謀で勝つことなど。
6. 中庸。例えば不偏不党、調和で頃合である、我慢して譲ることなど。
7. 私徳。例えば自分の便利、自分のきれいなことにだけ一生懸命になるが、公衆の秩序、公衆の財産、公衆衛生、礼儀を気にしないことなど。
8. 功利。たとえば金銭と地位のために手段を選ばないことなど。
9. 勤儉。例えば廉潔奉公、刻苦素朴、勤儉節約など。
10. 進取。例えば競争意識があり、勝利を勝ち取るために代価を惜しまない、現状に安んじない、敢然として冒険することなど。
11. 実用。例えば目の前の実在の利益と個人の満足を重視し、長期的計画と集団の利益はどうでもよいことなど。
12. 嫉妬。例えば自分の能力、地位、専門とほぼ同じような成功者を退け、相手の足場を掘り崩す、猜疑することなど。
13. 屈従。例えば盲目に権威に服従し、弱いものをいじめ、強いものを畏れる、権勢や財力におもねる手口など。
14. 欺瞞。例えば円滑、嘘を付くことなど。

以上の14項目の人格特質に対して、先と同様に5, 3, 1, 0, -1, -3, -5の7段階評価方式を採用し、最後に平均値を取る。得点の結果から見れば、得点が最も高いのは「気節」で4.05点

であり、その次は「忠孝」で、3.92点、第三位は「仁愛」の3.87点、第四位は「理智」の3.75点である。得点が最も低いのは「欺瞞」で、-3.83である（表3参照）。

表3 14項目人格特質の得点序列

人格特質	平均値	人格特質	平均値
気節	4.05	中庸	0.01
忠孝	3.92	実用	-0.63
仁愛	3.87	功利	-2.77
理智	3.75	私徳	-3.58
勤儉	3.10	屈従	-3.69
進取	2.91	嫉妬	-3.83
俠義	2.33	欺瞞	-3.83

P<0.05 N=1838

表3から、応答者の中に14項目の人格特性に対して三種類の評価があることが判る。一種類目は肯定的評価で、その得点平均値はプラスで、順番に云えば、気節、忠孝、仁愛、理智、勤儉、進取、俠義である。もう一種類は否定的評価で、その得点平均値はマイナスで、順番に云えば、功利、私徳、屈従、嫉妬、欺瞞である。第三種は中性的評価に近く、その得点平均値はプラスもあれば、マ

イナスもあるが、0点に近い。このような人格特質は中庸と実用の二項目である。ただし、中庸の平均値の符号はプラス、実用の符号はマイナスであった。

上述の7段階の評価方式がそれぞれ占めるパーセンテージから十四項目人格特質に対する評価を見れば、さらに各項目の人格特質に対する応答者の評価特徴が判る（表4参照）。例えば、応答者が人格特質に対して、5点及び-5点を与えるパーセンテージは、明らかに極端性を帯びている。14項目の人格特質の中で、俠義と中庸の二項目を除く肯定評価の6項目、即ち気節、忠孝、仁愛、理智、勤儉、進取は、すべて5点のパーセンテージが最も高く、7段階評価の首位を占めた。否定評価の6項目は、実用を除いて、功利、私徳、屈従、嫉妬、欺瞞の5項目で-5点のパーセンテージが最も高く、同じく7段階評価の中に首位を占めた。そしてこれらの人格特性の5点及び-5点のパーセンテージとその平均値とは比例関係をなす。即ち、5点のパーセンテージが高ければ高いほど平均値も高い；-5点のパーセンテージが高ければ高いほど、平均値の絶対値は大きく、平均値は小さく（マイナスに）なる。この種の評価の特徴は、

表4 14項目人格特質に対する7段階得点のパーセンテージ集計

(%)

人格特質 \ 得点 パーセンテージ	得点							Σ
	5	3	1	0	-1	-3	-5	
気節	66.3	23.8	4.7	4.1	0.5	0.4	0.2	100.0
忠孝	59.6	29.5	5.5	4.4	0.5	0.3	0.2	100.0
仁愛	57.0	32.9	5.5	4.1	0.2	0.2	0.2	100.0
理智	55.6	30.4	7.4	4.3	1.0	0.8	0.4	100.0
勤儉	41.4	34.0	11.6	8.2	2.5	1.4	1.0	100.0
進取	38.6	34.3	11.5	9.2	3.0	2.6	0.8	100.0
俠義	25.5	35.3	19.8	11.2	3.3	2.9	2.0	100.0
中庸	6.4	17.1	19.0	20.7	11.2	16.9	8.7	100.0
実用	4.3	12.2	14.3	20.7	16.0	23.0	9.6	100.0
功利	2.8	3.6	3.9	11.8	7.9	25.1	44.7	100.0
私徳	1.3	1.2	0.9	9.0	5.6	23.8	58.4	100.0
屈従	0.6	1.3	1.0	6.5	6.0	25.0	59.7	100.0
嫉妬	0.8	1.0	1.2	7.2	4.6	20.2	65.0	100.0
欺瞞	1.4	0.8	1.0	7.3	4.7	18.7	66.3	100.0

P<0.05 N=1838

次のような事実を表した：つまり、応答者にとって、肯定に値する人格特質に対して、5点を与えるケースは多く、3点を与えるケースは少なく、1点を与えるケースはもっと少ない。そして、否定すべきと思われる人格特質に対して、-5は最も多く、-3は比較的少なく、-1はもっと少ない。また、中庸と実用に対する評価を見ると、7段評価の中に0点のパーセンテージが最も高く、5点と-5点の評価が最も低い、そして、中庸項人格特質に対する肯定評価（5, 3, 1）の和42.5%は否定評価（-5, -3, -1）の和36.8%と接近していて、前者は後者より少し高い。同じように、実用項の肯定評価の和30.8%は否定評価の和48.6%ともそう遠くなく、後者は前者よりやや高い。一般的に云えば、中庸と実用に対する肯定評価と否定評価及び0点評価は中性に近いものである。

要するに、表4は三種類の最高パーセンテージの集中的分布区域を表している。即ち、5点分布、-5点分布と0点分布である。この三つの区域は明らかに評価の極端性と中間性を裏付けた。極端性と中間性は不協調に見えるが、しかしながら、極端性の背後に認知上の不明確性と曖昧性があり、中間性の背後に生活の中の自然的追求があるように思われ、中国人性格構成の矛盾性を表した。

[人格特質に対する異なる年齢層の評価]

質問票の問題に対する異なる年齢層の調査対象の見方を知るために、「課題」は四つの年齢指標——30歳以下、31~40歳、41~50歳、51歳以上——を設定した。この四つの年齢層はちょうど中国の違う歴史時期に成長してきた様々な人間の性格特徴を反映したものである。知識人を例にして

いえば、1966~1976の十年間に異なった体験をしてきている（表5参照）。現在30歳以下の青年は、十年動乱の時、まだ小学生であった。彼らは「文化大革命」の各種の活動に参加しなかったが、自分の目でこの心を痛める社会大動乱を見たのである。31~40才層の人々は、当時の中学生で、極めて吸引力のある革命スローガンに引きつけられ、街へ造反に行ったが、まもなく農村、工場、あるいは辺境農場に流された。41~50才の世代は、当時風采と才華と共に輝く「一代の天嬌」で、大学で革命を起こしたが、結局水泡に帰して、末端組織や部隊に行かされて、再教育を受けることになったのである。現在51才以上の知識人の当時の年齢は28~38才以上の者で、「三十にして立つ」という人生の最もいい時期を「革命の潮流」に流されてしまった。十年間は、歴史の長流の中で取るに足りないほど小さいかも知れないが、人間にとって、一旦失われたら再び来ないものである。「文革」の十年は、中国の幾世代の人間を冷酷な氷室に投じたが、彼らはまた氷室から覚めたのである。そのために、この四つの年齢層の価値観と価値判断は、時代の差による区別がある一方、共通の社会経験と文化背景を持っているという類似点もある。「課題」の研究範囲の中に、まさにこのような根強い類似点あるいは所謂「根性」のようなものが、中国国民性として現われたのである。

14項目の人格特質に対する四つの年齢層の評価特徴について、前述したように、14項目に対する評価の中に、5点、-5点及び0点の高いパーセンテージが大多数の人格特質に集中する分布状態が現われたので、比較上の便利のために、5点、-5点、0点の三つの評価における四つの年齢層のパーセンテージを比較することにした（表6参照）。

表6から、気節、忠孝、仁愛、理智、勤儉の5

表5 年齢層及びその社会経歴

社会経歴 年齢層(才)	1966-1976を社会背景として	
	年 齢	社会経歴
51以上 (04組)	29-38以上	事業をやることができない
41-50 (03組)	19-28	大学時代、学業をほったらかしにした
31-40 (02組)	9-18	中学時代、下放された
30以下 (01組)	8以下	小学時代、十年の動乱を見た

表6 四つの年齢層別における5点、-5点、0点得点表 (単位:%)

人格特質	年齢層											
	01組			02組			03組			04組		
得点	5	-5	0	5	-5	0	5	-5	0	5	-5	0
気節	62.3	0.5	4.2	64.2	0.0	4.7	74.5	0.0	3.3	75.7	0.0	4.0
忠孝	54.1	0.4	4.4	63.0	0.0	5.4	68.6	0.0	3.3	63.4	0.0	4.0
仁愛	54.0	0.2	4.4	55.1	0.2	4.9	62.8	0.0	2.7	65.8	0.5	3.0
理智	52.4	0.5	4.8	53.7	0.2	3.7	61.6	0.3	3.3	61.9	0.5	4.5
勤儉	31.9	0.6	10.5	41.8	0.7	7.9	56.9	0.7	5.0	58.4	3.5	5.0
進取	41.3	1.1	9.7	38.1	0.5	8.9	34.1	0.7	8.0	31.2	0.0	11.4
俠義	23.4	2.4	12.2	29.3	1.5	9.9	26.5	1.7	11.0	25.8	1.5	9.9
中庸	6.5	10.5	19.5	8.0	6.7	22.2	3.0	8.0	21.1	9.4	5.9	22.3
実用	4.6	8.8	23.7	4.0	8.9	17.7	1.6	13.4	19.4	5.5	8.9	16.3
功利	3.1	39.7	12.4	4.4	46.6	12.1	1.3	54.9	10.7	0.5	50.0	10.4
私徳	1.2	60.0	6.9	2.4	53.2	11.8	1.0	62.5	9.0	0.5	54.5	12.4
屈従	0.6	57.2	5.8	0.9	58.6	7.1	0.0	65.9	6.0	0.0	62.4	8.9
嫉妬	0.5	62.0	7.6	1.2	66.0	6.9	0.3	69.2	5.0	1.5	71.8	8.9
欺瞞	1.0	61.3	7.2	1.4	68.2	6.9	0.0	73.6	7.0	17.6	74.8	10.4

P<0.05 N=1838

項目人格特質の5点パーセンテージと年齢層の間の比例関係が判る、即ち、年齢が高ければ高いほど、パーセンテージも大きくなる。これらの伝統性を持つ人格特質を評価するに当たって、若い人より、年長者はもっと肯定的で、好きである。逆に、「進取」項に対して、年長者より、若い人はもっと肯定的で、好きであり、「功利」項に対して、年長者より、若い人の否定は少なく、価値観の相違を表した。しかし、14項目人格特質に対する四つの年齢層の評価は大同小異で、得点が最も高いのは気節で、最も低いのは欺瞞である。しかし、課題調査のほかのデータから見ると、得点の高い人格特質は、人々が最も具わっているとは限らないし、得点の低いものも、人々が最も欠如しているとは限らない。逆に、現実生活の中の人格特徴は、どうしても色々な形で人格評価の背後に隠れている。例えば、人々は気節という人格特質を好むが、現実生活の中に、気節を具えることは難しすぎる。また、欺瞞という人格特徴を徹底的に嫌うが、現実生活の中ではどうしても欺瞞から抜け出しにくく、それは事実上大きな役割を果たしたのである。

表6から、中庸項評価の0点のパーセンテージは、年長者より若い人の方が低く、実用項のそれ

について、若い人の方が高いことが判る。しかし、この二項目の人格特質の評価に当たって、すべての年齢層は0点パーセンテージが最も高く、中性評価が優位を示している。日常生活の場合、中庸と実用は最も良く見られる現象で、人々が実際信奉している人格特質である。

### [歴史人格に対する異なる選択]

「課題」では1950年代以後の中国の歴史を、1966年までの文化大革命前（文革前と略す）、1966～1976の文化大革命中（文革中と略す）、1980年代からの中国社会改革以後（改革後と略す）の三つの時期に分けた。そして、先の14項人格特質から、この三つの時期の大多数の人々が最も具えていたと思われる人格特質と、最も乏しかったと思われる人格特質を応答者に選択させることにした。その結果、非常に面白い現象が発見された。三つの時期の歴史人格に対する応答者の選択はそれぞれ大きく異なり、即ち、「文革前」の人格特質に対する選択は最も良く、「文革中」の人格特質に対する選択は最も悪く、「改革後」の人格特質に対する選択は、前二者の中間にある。ここでは前四位の結果を次のように紹介する：

最も具われている人格特質の前四位は：

文革前：勤儉 21%，仁愛 17%，忠孝 13%，気節 5%

文革中：屈従 16%，欺瞞 12%，中庸 11%，私徳 6%，功利 6%

改革後：進取 19%，実用 17%，功利 13%，理智 10%

最も乏しい人格特質の前四位は：

文革前：理智 14%，進取 13%，功利 7%，私徳 6%，屈従 6%

文革中：理智 19%，仁愛 15%，気節 11%，忠孝 5%

改革後：勤儉 23%，仁愛 14%，気節 10%，忠孝 10%

以上から判るように、応答者によって「文革前」において最も具わっていたものとして選ばれた前四位の人格特質は、すべて肯定評価された得点の高い特質であり、最も乏しかったとされた前四位の特質には肯定評価が二項目、否定評価が二項目ある。「文革中」において最も具わっていたとされる人格特質は基本的に否定的評価であり、その中の中庸と実用は中性的評価に近いが、功利と私徳は否定的に属する。最も乏しい人格特質はすべて得点の高い肯定的人格特質である。「改革後」において最も具わっているとされた前四位の人格特質の中で、進取と理智の二項目は肯定的評価であり、実用と功利は否定的評価である。進取と理智は文革前にない特質で、功利も文革前には乏しいとされた特質の一つである。即ち、改革後の人格特質の中に、文革前にない長所もあれば、文革前にない短所もある。しかし改革後の最も乏しい人格特質はすべて得点の高い肯定的人格特質である。さらに、歴史的人格に対する応答者のこのような選択をマトリックスで表現すれば、もっと意味深い（図1参照）。図1を構成する二本の軸のうち、横軸は歴史的人格に対する異なる選択を表し、縦軸は14項目人格特質に対する評価を表す。すなわち、右側は最も具わっている人格特質に対する選択で、左側は最も乏しい人格特質に対する選択を表す。また、上半部は肯定的評価に属し、下半部は否定的評価に属する。以上から図のように、四つの象限が形成される。

歴史的人格に対する選択の分布状態から見ると、

象限ⅠとⅢにある点が多ければ多いほど、当歴史的人格の素質がよいということが判る（8個を越えない）。こうして、「文革前」（太線）の選択点分布が最も良く、象限Ⅰに四つ、Ⅲに二つの点がある。その次は「改革後」で（点線）、象限Ⅰに二つの点がある。「文革中」の点は、一つを除いて全部象限Ⅱにある。以上の現象は、「文革中」と「改革後」の二つの時期において、得点の高い肯定的人格特質が欠如したことを説明できる。それでは、歴史的人格に対する応答者のこのような異なる評価と選択をどう理解すればよいのか。「文革中」と「改革後」に成長した人の人格の低下は、生まれつきのものであろうか。あるいは「文革前」に成長した人は、生まれてから良い人格を具えているのか。「課題」が実施した他の二つの比較研究はこれらの問題に対して、多少なりとも答えられるであろう。

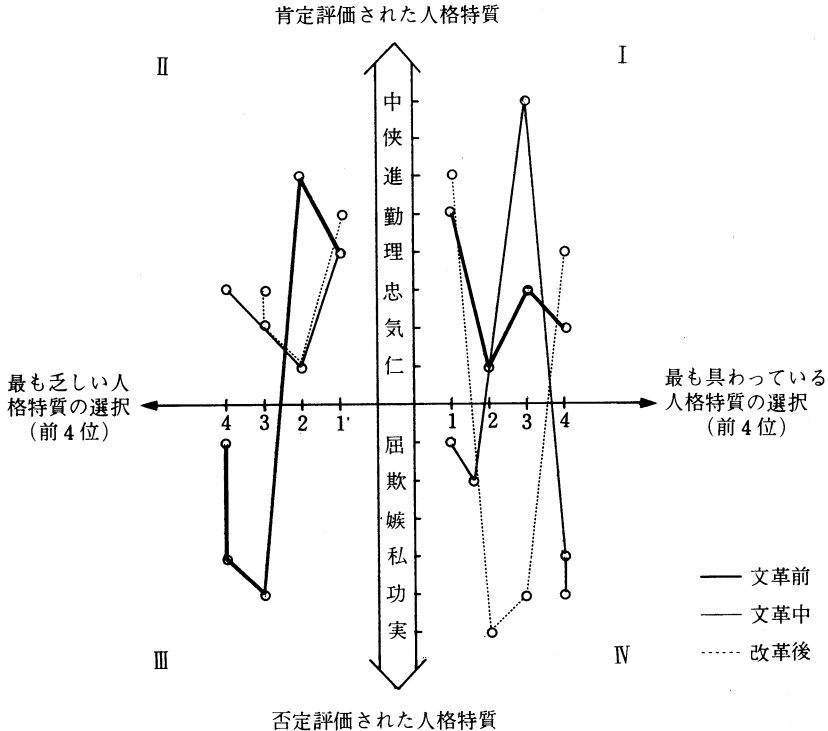
### 【人格と三つの歴史時期の間の親和性】

人格とその置かれた歴史時期の間の親和性とは、人格という心理構成及びその表現（G. W. オルポートの「社会心理学」1924において、人格は「社会人」と呼ばれた）と人々が生活している社会の間にある相互適応、相互選択の関係をさす。このような関係は、社会心理学の親和動機現象に類似し、言い換えれば、一定の歴史時期に生活する人は、彼らの社会生活環境に適応し、ごく自然に自分の心理活動を絶えず調整し、当社会特徴を持つ思考方式と行為方式を表す。この絶えず自分の心理活動を調整する過程は、実際、「適者生存」のような原則に基づいて、個人と社会の間の協調関係を築く過程である。だから、このような関係の成立は、社会と個人の双方の要求を満足する前提があって初めて可能になり、社会がこの種の人格を必要とし、個人がこの様な社会要求に適応しようとする時、社会と個人は互いに相手の需要を受け入れる。

歴史的人格に対する選択結果から見れば、「課題」の14項目の人格特質の中で、12項目が選ばれ、その中の8項目の選択頻度は比較的高い（表7参照）。

表7は少なくとも次のような三つの心理事実を

図1 三つの歴史時期における人格選択



示した。

第一、 応答者が選出した高い頻度の前7位は、功利項を除いて、そのほかの6項目は、すべて得点の高い、肯定的評価を得た特質である。後5位は中性評価に片寄る実用と中庸を除いて、すべて得点の低い、否定的評価を得た特質である。選択頻度の高さは、選択された人格特質に対する重視の程度を表し、温存、あるいは放棄の必要があると認めたとうえで、それを選択するのであろう。

第二、 選択頻度の高い前7項人格特質の中に、「有」の選択率が「無」の選択率より高い特質は、

わずか進取と功利の2項目であり、そのほか5項目は、すべて「無」(最も乏しい)の方が「有」(最も具わっている)より多い。例えば、仁愛項の選択頻度は46で、その中に無29、有17；勤儉項の選択頻度は44で、無23、有21；理智項の選択頻度は43で、無33、有10；忠孝項の選択頻度は28、無15、有13；気節項の選択頻度は26、無21、有5である。この結果から、質問票において得点の高い人格特質は、基本的に人々が余り持っていないものであることと判る。逆に、得点の低い人格特質に対して、基本的に「無」選択より、「有」選択の方が多

表7 三つの歴史時期における人格特質の選択頻度

人格特質	仁愛	勤儉	理智	進取	忠孝	功利	気節	実用	屈従	欺瞞	中庸	私徳
標本合計	46	44	43	32	28	20	26	17	16	12	11	12
文革新前	有	17	21			13		5				
	無			14	13		7					6
文革新中	有								16	12	11	6
	無	15		19		5	11					
改革後	有			10	19		13	17				
	無	14	23			10	10					



く、即ち、人々は余りよくない人格特質を多く持っていると言える。

第三、歴史時期別から見れば、得点の高い人格特質は「文革前」の人格に最も多く、「改革後」の人格にも多くあるが；得点の低い人格特質は「文革中」の人格に最も多く、「改革後」の人格にも多い。

この様に、我々は表7の各種の数字から人々の人格特質はその置かれた歴史時期と密接な関係を持つことが判る。即ち、異なる歴史時期において、人々に具わっている人格特質、あるいは乏しい人格特質は異なり、そこには一種の「親和」関係がある。この様な人格とその置かれた歴史時期の間の親和関係をより理解するために、「課題」は人間関係（あるいは人間魅力）測定の中の「人間互選マトリックス」を借用して、表7に選ばれた12項目の人格特質をマトリックスの中の被選択者側にし、質問票で使われた四つの職業組<sup>2)</sup>が三つの歴史時期における人格特質の前四位を選択した結果をマトリックスの選択者側にし、12×12のマトリックスを形成した（図2参照）。

二つの交差して形成した分布状態から見ると、「文革前」の○（有）選択は全部得点の高い部位に集中し、×（無）選択は、得点の高い部位と低い

部位にそれぞれ2項目ずつある。「文革中」の○選択は、すべて得点の低い部位に集中し、×選択はすべて得点の高い部位にある。「改革後」の○選択は、得点の高い部位と低い部位にそれぞれ2項目ずつある。

吸引と排斥の意味から、○（有）選択と×（無）選択を見れば、次のことがはっきり判るであろう：「文革前」（特に50年代中期以前）は「太平盛代」に属し、仁愛、勤儉、忠孝、気節のような伝統性を持つ人格特質の間に吸引力があり、理智、進取、功利、実用のような現代人が受け入れやすい人格特質の間に排斥性がある；「文革中」の十年は、「乱世」に属し、屈従、欺瞞、中庸、私徳のような消極的に自分を守る人格特質の間に吸引力があるが、仁愛、理智、忠孝、気節のような他人を愛し、尊敬する、そして自愛自尊する人格特質の間に、不可避に互いに排斥する；「改革」は社会を治めることで、特に社会体制の改革は「治」の要である。だから、「改革後」という歴史時期は「治の中に乱あり」、人間の心理活動も様々で、複雑である。何と言っても、人間は歴史と社会が提供した環境で生活し、彼らのエネルギーと能力の発揮はこの環境に拘束される。そのため、社会と人間の間で一定の（相対的）均衡状態を維持する。

		選択者			
		肉脳サ学	肉脳サ学	肉脳サ学	
		(文革前)	(文革中)	(改革後)	Σ O X
選択されたもの	仁愛	○ ○ ○ ○	× × × ×	× × × ×	12 4 8
	勤儉	○ ○ ○ ○		× × × ×	8 4 4
	理智	× × × ×	× × × ×	○ ○ ○ ○	12 4 8
	進取	× × × ×		○ ○ ○ ○	8 4 4
	忠孝	○ ○ ○ ○	× × × ×	× × × ×	12 4 8
	功利	× × × ×		○ ○ ○ ○	8 4 4
	気節	○ ○ ○ ○	× × × ×	× × × ×	12 4 8
	実用	× × × ×		○ ○ ○ ○	8 4 4
	屈従		○ ○ ○ ○		4 4
	欺瞞		○ ○ ○ ○		4 4
	中庸		○ ○ ○ ○		4 4
	私徳		○ ○ ○ ○		4 4
Σ		8 8 8 8	8 8 8 8	8 8 8 8	96

図2 人格特質と歴史時期の親和選択

2) 課題調査の職業指標としての四つの職業組は：肉体労働、頭脳労働、サービス業、学生である。

### [歴史人格に対する認知の不均衡性]

表面から見れば、三つの時期の歴史人格に対する○選択と×選択は、明らかに明確な肯定評価あるいは否定評価を表した。しかし、調査のデータからも他の現象を発見した。即ち、歴史人格に対する肯定評価と否定評価上の幾つかの曖昧性である。

14項目人格に対する評価と三つの時期の歴史人格に対する○選択と×選択をした基礎の上に、課題はファジ理論を利用して総合的判断分析をした。その結果、「文革前」、「文革中」、「改革後」のそれぞれの最も具わっていると乏しい人格特質の総合得点は、B\*1とB\*2で示した通りである<sup>3)</sup>。

B1\*は三つの歴史時期における最も具わっている人格特質の総合得点を代表し、「文革前」の得点(79.66)は最も高く、「文革中」の得点(35.65)は最も低い。B2\*は最も乏しい人格特質の総合得点を代表し、「文革中」は最も高く(78.43)、否定された人格特質が一番多く、「文革前」の得点は最も少なく(55.44)、否定されたものが少ないと言える。

しかし、B1\*とB2\*も我々に二つの50点前後に徘徊する数字(B1\*の53.20とB2\*の55.44)を提供してくれた。50点は100点制得点の中に中性的価値判断に属し、判断上の曖昧性を表し、重

視に値する。総合してみれば、人々は「文革前」の人格に最も欠如した特質(人格欠点)はどんなものか、「改革後」の人格の中に最も具わっている特質(人格美点)はどんなものかについて、はっきりしない。図2から判るように、この二つの中性判断に近い人格特質は、主に理智、進取、功利と実用である。「文革前」に欠如したのは、「改革後」にあるものであるが、しかし、総合判断から見ると、「文革前」に欠如したものと「改革後」に具わっているものは一体どんなものであるかについて、人々の判断と認知は余りはっきりしていない。

価値判断と認知の曖昧性は、無論、国民性の表現の一種であるが、結局、社会生活の曖昧性と不透明性と離れることができない。もっともらしいようで間違っているし、是でもなければ非でもない、去就に迷って、認知の均衡を失ってしまったのである。

「課題」から提出した問題も、調査データも限りがあるが、今後の研究によって、反復の調査と、不断の修正と補充を必要とする。しかし、課題は大量のデータを通じて、異なる側面から中国社会心理と民族性格構成の幾つの特徴を明らかにした。その重要な点は、その曖昧性、矛盾性と不協調性である。

1989年8月 東京

3) 総合判断分析の中の得点は質問票の七段階評価を通常の100点制にしたものである。即ち、5=100, 3=80, 1=60, 0=50, -1=40, -3=50, -5=0である。

	5	3	1	0	-1	-3	-5
B1*	0.462,	0.294,	0.084,	0.069,	0.022,	0.030,	0.039—文革前
	0.125,	0.106,	0.064,	0.100,	0.061,	0.172,	0.373—文革中
	0.225,	0.185,	0.087,	0.111,	0.064,	0.132,	0.197—改革後
B2*	0.268,	0.192,	0.076,	0.092,	0.048,	0.084,	0.213—文革前
	0.471,	0.273,	0.076,	0.065,	0.022,	0.038,	0.055—文革中
	0.415,	0.271,	0.086,	0.075,	0.027,	0.079,	0.079—改革後

「文革前」の最も具わっている人格特質の七段階得点を100点制に換算すれば、即ち：79.66=0.462×100+0.294×80+0.084×60+0.069×50+0.022×40+0.030×20+0.039×0。このほかの総合得点の計算はこれに準じて類推する。

$$B*1 = \begin{bmatrix} 79.66 \text{—文革前} \\ 35.65 \text{—文革中} \\ 53.20 \text{—改革後} \end{bmatrix} \quad B*2 = \begin{bmatrix} 55.44 \text{—文革前} \\ 78.43 \text{—文革中} \\ 74.10 \text{—改革後} \end{bmatrix}$$